

第六回シンポジウムの開催にあたって

中国第一歴史檔案館館長 邢 永福

御出席の皆様

十月の北京は特に人々を魅了させる季節です。今日はまだ秋雨がしとしとと降っていますが、明日はきつと天高く爽やかで、うらかな天気になることでしょう。新世紀の一番最初のこの素晴らしい秋の季節に、私たちはここで第六回中国・琉球交渉史に関するシンポジウムを開催いたします。はじめに、中央檔案館国家檔案局毛福民館局長、中国第一歴史檔案館の職員を代表しまして、遠路はるばる来られた沖縄県教育委員会津嘉山朝祥教育長、沖縄県教育委員会の代表団の皆様ならびに関係する日中の研究者の皆様、来賓の皆様に対し熱烈なる歓迎と心からの感謝を申し上げるとともに、あわせて熱誠な敬意を表します。

一九九一年のはじめ、中国第一歴史檔案館と沖縄県教育委員会は相互交流の覚書に調印後、非常に成果のある協力関係を築いてきました。この基礎の上に、一九九八年、双方は中琉歴史関係学術交流を継続して行う協議書に調印いたしました。この十一年を振り返ってみると、時間は長くありませんが、交流が途絶えることはなく、学術交流は頻繁に行われ、お互いに刺激しあい、多大な成果を収め、中琉歴史関係研究を大きく進展させました。双方はすでに五回もの中国・琉球交渉史に関するシンポジウムを交互に開催し、五冊の学術論文集を出版し、双方で三十

本以上の學術論文を發表いたしました。論文の内容は冊封、朝貢、貿易、文書制度、琉球官生留学、双方での海上遭難者の救助保護、中国沿海各省での琉球国使臣の上京と帰国の際の護送及び接待、そして、中琉の使者の活動、琉球人の中国での病死、救助保護、葬儀など各方面に及んでおります。双方の学者の訪問を通して、国子監、円明園、張家灣、東西陵、首里城、久米村などの文化遺跡を調査し、理解と友誼を深めました。一九九五年と二〇〇〇年、沖縄県公文書館における清代琉球国王表奏文書展覽会の開催も成功を収めました。これらの有意義な活動を通して、歴史を紹介しあい、影響を及ぼし、多くの人が次のような理解を深められたと思います。つまり中琉歴史関係は歴史が古く、早くは紀元六世紀の隋の時代に、中琉間ではすでに文化、経済貿易交流が行われており、明清代に至って両国の関係はさらに進展し、冊封、進貢等を通じて、長期にわたり親密な友好関係を維持し、友誼は絶えることはありませんでした。経済貿易、文化交流も日々活発になり、中琉間の長期にわたる交流活動の中で、多くの檔案文献がつけられました。中国第一歴史檔案館には数千件の中琉交流の文書が保存されているだけですが、これらの貴重な檔案文献は両国の親密な交流の真実の記録と象徴であり、また今日、中琉歴史関係を研究するための貴重な第一級の史料です。

中琉歴史関係學術シンポジウムが進展する中、中国第一歴史檔案館も中琉歴史関係史料の整理、編集、出版業務に力を入れ、ここ十年来、『清代中琉関係檔案選編』、『統編』、『三編』、『四編』、『清代琉球国王表奏文書選録』等を、相次いで出版してきました。また、首里城(財)海洋博覧会記念公園管理財団が復元した康熙帝の御書「中山世土」の扁額、二顆の銀製の「琉球国王之印」は中国第一歴史檔案館の文献史料を拠り所としています。また、沖縄県立図書館史料編集室(現(財)沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室)編集、沖縄県教育委員会発行の

『歴代宝案』校訂本は内容が豊富で、校訂と注釈も詳細であり、人々の注目を集めています。中琉双方は継続して貴重な史料を出版し、中琉歴史関係研究をさらに推し進めるためにしっかりと基礎を固めています。

今回のシンポジウムでは九篇の論文が発表されます。日本側が三篇、中国側が六篇です。論文の数はこれまでの中で最も多く、題目も斬新で、広範囲に及んでいます。専門家の方々が各自の意見を遠慮することなく述べられ、研究、交流が深められることを希望します。今回のシンポジウムが皆様の一致団結した努力のもと、必ずや新機軸、功績をうちたて、中琉歴史関係研究がひとつの新しいステップへ踏み出すことを私たちは信じています。

最後に第六回中国・琉球交渉史に関するシンポジウムの成功を祈念いたします。どうもありがとうございます。